

第5章

具体的事例



グラナダ：イピコ(馬)の行進

草の根援助の具体的な例を紹介する。とくに筆者がその竣工式に実際に出席したものを取り上げて説明する。また、モニタリングの実例や他ドナーの援助も簡単に紹介する。

一 教育案件

ニカラグアには、小学校が八五〇〇校以上、中学校が一三〇〇校以上あるといわれる。しかし学校建設の要請は、草の根を通して頻繁に來ている。教育年齢に達する子供の人口が急激に増えるのに学校建設が間に合わないのと、教育予算の不足が影響して大使館には数多くの要望が寄せられる。また、当地では日本の一般プロジェクト無償を使用した学校建設が手厚く行われており二〇〇六年度末までに小中学校を一四三校建設した。さらに二〇〇七年度末までに六五校、合計二〇八校の建設が計画された。一方、草の根援助は地元業者、地元の建材を使う関係で低コストにできる利点がある。二〇〇六年度末までに草の根によって行われた小中学校（養護学校等の特殊学校を含む）の新改築、増築、修繕は七三校に達した。

ここで紹介する学校建設は、ヌエバ・セゴビア県ウイウイリ市の山奥にある農村小学校

の案件である。二〇〇六年に申請され、ピタ・エル・ホボ地区の小学校の一教室を取り壊して二教室を新築、およびオコンワス地区の小学校の二教室を取り壊して三教室を新築するものであった。後者は井戸の掘削も含まれた。総費用は申請ベースで七七九万円であった。申請団体はヌエバ・セゴビア県のウイウイリ市だった（ウイウイリ市はココ河を挟んでヒノテガ県にもある）。同市役所は、二小学校に必要な机付き椅子などの教室用家具約二〇〇〇米ドル相当を負担することを約束した。調印式は二〇〇六年六月二三日に大使館で行われた。

竣工式

とにかく非常に遠く、深い山奥にある小学校である。この竣工式には、ウイウイリ市の近くにあるキラリ市の水道案件、およびテルパネカ市の水道案件の竣工式を合わせて一泊二日で行くことになった。さて、二〇〇七年三月一五日の朝七時にマナグアを出発して、陸路パン・アメリカン・ハイウェイをランドクルーザーで北に向かう。草の根班のKさんが同行する。ヌエバ・セゴビア県はニカラグアの最北端、ホンジュラスと国境を接している。そのキラリという町まで五時間かけて正午に到着。ウイウイリ市長のペドロ・カステイーヨ氏、警察と軍の代表がわれわれの到着を待っていた。そこからさらに東に進む。



写真32. 乾季に咲くコルテスの黄色い花

乾季の山はほとんど枯れた木々で覆われている。所々に目の覚めるような黄色い花をつけた木が見える。コルテスという木だそうである（写真32参照）。約四五分でピタ・エル・ホボ山中の小学校に到着した。蝉の声がうるさいほど耳に響き、山全体が鳴っているようである。

新築の教室は、山の中腹に建てられ、周りを見渡す限りの山々に囲まれている。青い屋根、白い壁が日光を反射してまぶしい。隣に旧校舎が残っているが非常に粗末なものだ（写真33）。窓はがらんどろである。授業中に虫や小鳥が飛び込んできただろう。また、雨季には窓から雨が入ってきたり、屋根の雨漏りもしたのである。



写真33. 市長と旧教室



写真34. 新教室内部

式典は新教室のなかで執り行われた（写真34）。黒板の所に大きな紙が張っており、「ラ・ピタ・エル・ホボならびにオコンワス新校舎完成式へようこそ」と大書してある。天井には風船や紙テープで飾り付けがしてあり、ニカラグア国旗の色と同色の白と青が使われている。関係者が前に座り、児童と父兄が教室に一杯に來ている。入りきれない人々が窓から中をのぞいている。女生徒は白いシャツに紺のスカート、男生徒は白のシャツと黒のズボンを穿き、皆こぎつぱりとしている。三、四年前に比べると皆が靴を履いているのが大変な変化である。以前は山奥の子供は、裸足かゴム草履みたいなものしか履いていなかった。まず式典は、両国歌斉唱で始まった。そして來賓の挨拶、市長の挨拶と続く。父兄代表の挨拶には、子供たちが新しい校舎で勉強できる喜びが素朴に滲んでいる。市長から大使館あての感謝状が渡され、続いて大使館からも市長と学校長に日本のカレンダーや折り紙の入った袋が渡される。次に生徒たちによる歓迎の踊りが披露された。四人のギターを持った楽団が入ってくる。ギターは、普通のギターに加え、ウクレレのような小型のギター、それに非常に大型で胴の所が丸みを帯びた低音の出せるギターを抱えている。踊り手は二人の女生徒で、それぞれ白と青の民族衣装を着ている。手を広げると蝶のように見える袂の長いものだ。三、四曲の歌とともに踊りが披露されたがいずれも軽快なものであった。続

いて教室の入り口で市長とともにテープ・カット式が行われた。テープも青と白の国旗に模した色で巻いてあり、心憎い演出である。また、校舎の壁に嵌められた銘版の除幕式も行われた。銘版には、これは日本政府の援助によって建てられた学校であると書かれていて、両国の国旗が付いている。そのあとは飲み物で乾杯。見学の人たちも飲み物やおやつにありつけるので皆ニコニコしている。それから校庭で記念撮影となり、子供たちと一緒に写真を撮った。学童年齢に達しない子供たちもたくさん来ている。こんな山奥に一体どこから集まってきたのかと思うほど多い。やがてこの子たちもここの校門を潜るであろう。このプロジェクトで直接受益する生徒の数は、約八〇人である。しかし、校舎はこれから十年、二十年と子供たちを送り出していくであろう。教育は国の基礎なので、こんな山奥まで日本の援助が入って人づくりに貢献していると思うと少し感動した。

二 保健案件

ニカラグアでは医療制度は比較的充実している。総合病院が三〇以上あり、日本の保健所にあたる保健センター（診療機能を持つ）は一七〇以上、そのうちベッドが設置されてい

るのは二五以上、保健センターを小規模にした保健ポストは八七〇以上あるといわれている。こうした公立の医療機関では基本的に診察料は無料である。日本はこの分野を援助の重点分野にしているので、今までも一般無償を用いて総合病院をひとつ建設した（グラナダの日本—ニカラグア友好病院、またボアコに新たに二〇〇七年度から総合病院の建設着手）。保健センターは二〇〇六年度までに一二センターを新築した。しかしニカラグア全体では保健サービスに対する需要が多く、供給が追いつかない。そこで草の根にも保健センターの改修や、保健ポストの新築が要請されてくる。

エル・トルトゥゲーロ保健システム改善計画

南大西洋自治区のエル・トルトゥゲーロ市から保健関連プロジェクトが二〇〇五年に要請された（表四—三、二八番参照）。この町は陸の孤島であり、陸路によるアクセスはない。河を使った水路のみである。難病の病人が出ると大病院のあるブルーフィールズの町まで、パンガという船で運ばなければならず、片道四〜五時間かかる。町に保健センターはあるが老朽化していた。そこで同市の保健システムを改善して、市民の健康・安全を守るため次の計画が要請された。カウンターパートは同市役所である。まず（一）市民からの要請の多かった新しい産院（「母の家」）の新設である。次に（二）老朽化した保健センターの改

修、そして(3) 必要な医療機材(二二点)の供与、最後に(4) 救急車にあたる救急モーターボートの供与であった。総費用は申請ベースで九六八万二〇〇〇円。大使館での調印式は二〇〇六年三月一五日に行われた。

大部分の建設資材をブルーフィールズないしラグナ・デ・ペルラスから船で運ばなければならず大変であるが、工事は二〇〇六年中にすべてを終了した。竣工式は乾季が良いということので二〇〇七年の一月末まで延ばされたが、産院等はすでに二〇〇六年一一月から運用開始された。

竣工式

エル・トルトゥゲローはとにかく遠いところにある。マナグアから往復するのに三日かかる。初日は空路でマナグアからカリブ海側のブルーフィールズまで飛ぶ。二日目に朝早くパンガと呼ばれるモーターボートに乗り、ブルーフィールズ湾を北上してククラヒルからラグナ・デ・ペルラスに行く。そこまで一時間かかる。次に浜名湖のような塩水湖(ラグナ・デ・ペルラス湖は「真珠の湖」という意味)を北上すること一時間、第二ククラ・ワラ河の河口に達する。西に向かってその河を遡ること二時間、やっとエル・トルトゥゲロー市に到着する。船で四時間かかる訳であるが、風が強く波が高いと五〜六時間かかることも

あるとのことだ。その日のうちにブルーフィールズにまた約四時間かけて戻り、同日はブ

ルーフィールズに宿泊、三日目にブルーフィールズから空路でマナグアに戻ることになる。

二〇〇七年一月三十一日に空路でブルーフィールズ市に飛んだ。大使館からは筆者と経済協力担当のOさん、また、JICA専門家として農林省(MAGFOR)に來ているHさんの三人である。ブルーフィールズでは先に来ていた草の根班のTさんが加わった。翌二月一日は早朝六時に波止場に集合した。保健省がパンガを出してくれるとのこと、それに乗り込んだ。保健省の職員も同行する。まず港の海軍省の事務所に行きエル・トルトゥゲーロまでの航行許可を取る。バナナや飲み物を買っていよいよ出発である。パンガは日本の小型漁船のような形をしたモーターボートでスクリュー付きエンジンが後ろにある。座席は板なので長時間座っていてもおしりが痛くならないようにクッションを当てる。一応背板もついているが疲れることに変わりはない。救命胴衣を着ているので着膨れで皆丸くなっている。ブルーフィールズ湾は朝日を反射してキラキラ輝いている。結構波があり揺れながら、かつて魚の加工工場のあった島を通る。湾を北上して天然の運河のような河に入ると水面は真っ平らになり揺れはピタリと止まる。水面に岸のマングローブやアフリカ椰子それに真っ青な空が映っている。エンジンは快調にピッチを上げてスピードも速まる。時



写真35. ニカラグアの気になる木

々行き交う船が来ると手を振って挨拶を交わす。ラグナ・デ・ペルラスの塩水湖に入るとまた波が出てきた。舷を越えて水が入り込むこともある。湖の北端に流れ込むククラ・ワラ河口に到着、ここまでブルーフィールズから二時間かかった。いよいよ河を遡る。熱帯林の中に時々背の非常に高いまた品格の漂う巨木が立っている。「気になる木」だ（写真35参照）。河の両岸が牧場になっているところもあり牛がのんびり草を食んでいる。川面には時々白鷺が立っている。河は大きく蛇行したりするので眠くなる。また、日差しが強い日光が容赦なくわれわれを射し、水面の反射光とともに顔が日焼けで火照ってくる。うつらうつらすること二時間、やっとエル・トルトゥ

ゲーロに到着した。

エル・トルトゥゲーロの船着場には、市長のオルランド・サバジョ氏はじめ関係者が出迎えてくれた。中学生の吹奏楽団がニカラグアの民謡を吹き鳴らし、なかなかにぎやかなお迎えだ。船着場から産院のある場所までは小中学生が隊列を組み、バンドを従えて進む。町のメイン・ストリート（といってもこの一本道しかないが）を市民が見守る中、しずしずと行進する。制服を着た軍の関係者が横を歩く。市長は自由党系（PLC、立憲自由党）で赤い野球帽を被っている。前のアレマン大統領がヘリコプターで訪れたことはあるが、水路ここに来た政治家はいないと言う。一〇分ほど歩いて新設された産院に到着した。産院は風船やリボンできれいに飾り付けられている。式典が始まるまで少し待つことになった。その間、市長が自らマイクや拡声器を用意して調節などしている。町自身は小さいので人手が足りないのかもしれない。人口は周辺の村落を含めて二万人位とのことである。

「母の家」として作られた産院は、面積二二〇・八五平方メートル、看護・治療室、ベッドルーム、食堂兼居間、台所、トイレ・シャワー室が付いている。すぐ傍に保健センターがあり、医師、看護師がいてこちらにも診に来るので赤ちゃんを産むには安全で安心な場所である。



写真36. 新生児を抱くお母さんたちと一緒に

さて、式典が始まった。まず恒例の国歌の斉唱で、皆起立する。はじめにニカラグア国歌のテープが流れ、皆が合わせて歌う。次に日本国歌のCDが流れる。日本人は少ないので歌わないが、君が代が厳かに熱帯の辺境の町に流れる。耳慣れない旋律、笙や太鼓の音が一瞬の静寂を作る。それが終わると来賓の挨拶がある。まず保健省の地区担当のお役人が話す。彼は本日パンガを出してくれ一緒にブルーフィールズから同行した人である。次にここで看護師をしている女性が歓迎の意を述べる。彼女は、週日ここで働き週末は出身のブルーフィールズに戻るとのことである。次にこの産院で赤ちゃんを産んだ女性が感謝の言葉を述べる。日本の援助が実際に役に立つ

ているのを実感する瞬間だ。市長の挨拶に続き筆者も簡単な挨拶をする。そして記念撮影となる。この施設で生まれたばかりの赤ちゃんとお母さん三組を中心に市長たちと一緒に写真を撮る(写真36)。

次に施設の見学で、まず治療室を見る。医療器具も日本から供与されたものである。日の丸のマークないし経済協力のODAマークが付いている。ベッドルームでは新生児を抱いたお母さんたちがニコニコしている。トイレもチェックのために入り水を流してみた。OKである。電気は太陽電池を使うが、うまく機能しているとのことである。

引き続き隣の保健センターを見学する。このセンターも今回草の根援助の対象になり、屋根、天井、窓、窓用鉄格子、トイレ等が改修され、また水道システムも改修された。このセンターには若い医師が常駐し病人を診ている。当地では女性は一二歳ぐらいで子供を産んでしまうケースがあり、性教育が重要である。センターでもおもに女性を対象とした教室を開くそうだ。

昼食の時間となり、近くの医師の自宅でお昼をごちそうになった。地方の典型的なニカラグア料理である。ガジョピントといわれるご飯(お米をフリホールといわれる赤いマメ、鶏肉などと一緒に炒めたもの)、焼いた牛肉、バナナのフライ、塩辛い豆腐のような白いチー



写真37. 日本の贈った救急パンガとTさん

ズなどである。若いドクターは難しい急患が出たとき、四〇五時間かけてブルーフィールドまで運ばなければならず大変だと訴える。その点今回の日本の援助で専用の救急ボートができたことは大変ありがたいと感謝を述べた。この保健案件で受益する人々は、約一万人以上と推計される。

ブルーフィールドに戻る時間が近づき、皆に挨拶をして船着場に向かう。船着場では日本が今回供与した救急モーターボートが浮かんでいて、横腹に日本からの援助と記されている。このプロジェクトを指導した草の根班のTさんに乗ってもらい記念写真を撮る（写真37）。

帰りは同じコースで水路を約四時間かけて

ブルーフィールズに戻った。この時、急患の中年女性をブルーフィールズまで同乗させてくれと頼まれた。大分苦しいようで咳をしたりしている。筆者の前の席に座り時々唾を吐くのであるが、それが風を切って走る船の舷の外ではなくて筆者の顔に飛んでくるのには参った。ひたすら頭を下げて耐える四時間であった。

三 民生環境案件（ゴミ収集）

二〇〇二〜二〇〇三年度はゴミ収集用のトラックを供与する案件が集中した。たとえば、二〇〇三年度は六二件の草の根援助が行われたが、一四件がゴミ収集車の供与案件であった。ゴミ収集車は小型のダンプカーをもう少し簡便にしたものである。市役所がこれを所有してゴミを収集し、町外れのゴミ捨て場に捨てる。分別収集はまだほとんどの町で行われていない。ゴミのポイ捨ても非常に多いのが現状である。また、ゴミ捨て場の整備、有害物質の処理、ゴミ捨て場でゴミを拾う子供たちの教育等ゴミをめぐる諸問題は深刻である。ゴミ処理を環境問題として捉え積極的に関与しているポアコ、マサヤ、ナガロテのよな市もあるが、それらはまだ例外と言ってよい。

ここで取り上げる案件は二〇〇三年に承認されたリバス市とサン・ファン・デル・スル市のものである。両市ともマナグアの南西、太平洋側に位置している。リバス市ゴミ収集車整備計画は、同市人口約六万人に対して、ゴミ収集車二台を供与するもので申請ベースの費用は六八九万円であった。大使館における調印式は、二〇〇三年一月四日に行われた。サン・ファン・デル・スル市のゴミ収集車整備計画は、同市の人口約八〇〇〇人に加えて、同市はニカラグアでも有数の観光地であり、観光客が毎年五万人ばかり訪れる。そのためゴミの量も多くその処理が大きな問題になっている。ここにもゴミ収集車を二台供与することになり、費用は同じく六八九万円、調印式は二〇〇三年一月二四日に行われた。

引渡し式

両市が近いところにあるので同日に引渡し式をすることにして、二〇〇四年五月二八日にリバスに向かった。同行は経済協力担当のOさんと草の根班のKさんである。マナグアを出て南に向かう。エル・クルセロという高地まで上る。カラソ台地といわれる高台を走ると左側にニカラグア湖が出現する。この湖は琵琶湖の一・二倍あるといわれる巨大湖である。さらに走ると周りは水田が広がっている。また、この隣国コスタリカにつながるパン・アメリカン・ハイウェイでは日本の援助でできた橋をいくつか通過する。広大なバナナの畑



写真38. 市庁舎中庭の式典

も見える。このバナナは甘くない種類でプラタノと呼ばれ、フライやチップスにして食べる。約二時間でリバス市に到着。

市庁舎は立派な建物である。市長のマウリシオ・ウルテチヨ氏が町の説明をしてくれる。このあたりに住んでいた先住民の酋長をニカラオと呼び、ニカラグアという国名の起源になったそうだ。町ができて今年はおちょうど二三五周年にあたる。市庁舎の中庭で式典は行われた(写真38参照)。例のごとく両国国歌の斉唱が始まり、来賓たちの挨拶で終わる。そして、新しいゴミ収集車の鍵が日本側から市長に手渡された(写真39)。

続いて市庁舎前に置かれた二台のゴミ収集車の始動式で、市長がそのうちの一台のゴミ



写真39. 市長に手渡されたトラックの鍵



写真40. サン・ファン・デル・スルの砂浜

収集車に乗り込みエンジンをかける。良い音をしてエンジンが回り、カメラのフラッシュがたかれ皆から一斉に拍手が起こる。そして飲み物で乾杯して式典は終わった。この案件では二万五千人以上が受益することになる。市長からは次のプロジェクトと称して橋の案件の提案書を受け取ることになった。なかなか抜け目のない市長だ。

リバス市からさらに南下して、途中から太平洋岸に入るが、道路がでこぼこである。道路は補修までなかなか手が回らないようだ。やがて湾が見えてくる。大きくはないがすばらしく景色のきれいな湾である(写真40)。約一時間でサン・ファン・デル・スル市に着いた。ここは観光地として大変有名で、湾なので大型の観光船も入ることができる。また近辺の海岸ではサーフィンに適した波が来るので若者にもよく知られている。大使館一行はまず浜辺のレストランで昼食をとった。久しぶりに新鮮でおいしい海産物を堪能した。次に港湾公社所有の棧橋を見学した。ここは日本の水産無償による零細漁業民を対象とした港湾施設改善計画の候補地になっている。棧橋、水産市場設備、製氷工場、船舶修理場といった施設を建設する計画があるがまだ決定したわけではない(その後同計画は採択され、最終的に二〇〇七年二月に建設を終了)。

式典は同市市役所の前で行われた。ビセンテ・アベラルド市長は、心臓を病んでいるそう



写真41. 二台のゴミ収集車

でちよつと元気がない。しかし市会議員にあたる市評議員たちは大変喜んで歓待してくれた。地方選挙が本年（二〇〇四年）一月に予定されていて、市長、市評議員は改選されるそうだが、ここは左派のサンディニスタの強いところでもまた同派の市長が選ばれるだろうとのことである。二台のゴミ収集車はここで活躍してくれるだろう（写真41）。なにしろ年間五万人の観光客が訪れるところなのだから。

四 水道案件

水道案件は草の根援助の対象として非常に多いプロジェクトである。農村部ないし山間部においては上水の確保が住民の死活問題で

あるが、概して予算制約から住民が自分たちで自主的に水を確保しているケースが多い。水の案件は、井戸を掘る、貯水槽を作る、ため池や水槽タンクの水を塩化ビニールのパイプで住民に給水するといった工事を含む。チナンデガ県エル・ビエホ市のプンタ・ニャータは、太平洋岸のコシグイナ火山の近くにあり乾燥地帯として有名である。とにかく同県はニカラグアで最も暑い県として知られている。この案件は、(1) 既存の井戸に七・五馬力の水中ポンプを設置する、(2) 五〇〇〇ガロンの貯水タンクを建設する、(3) タンクから集落までの一五〇〇メートルに導水管を、ならびに各戸に配水管(合計一五〇〇メートル)を敷設する、というものだった。総費用は申請ベースで約六〇三万円。この水道案件は、二〇〇四年に申請され、カウンタートパートはプンタ・ニャータ住民水道委員会、調印式は二〇〇四年一月三〇日に行われた。

竣工式

二〇〇五年六月一七日の朝六時にマナグアを出発して、西北のチナンデガを目指す。大使館から経済協力担当のOさん、草の根班のKさんが同行する。二〇〇三年時点までは道路が整備されていなくてチナンデガ市まで三時間半ぐらいかかったが、今では舗装道路が完成し二時間で行くことができる。エル・ビエホ市を通過、ここには矢崎総業のワイヤー

ハーネスの工場がある。実際には、メキシコと日本の合弁会社として作られたアルネコンという会社がメキシコから投資した形になっているが、三工場で三〇〇〇人を雇用しておりニカラグア政府から大変喜ばれている。エル・ビエホ市はとも大きな地域をカバーしており、ホンセカ湾に接する半島の先端まで含んでいる。人口は七万六千人以上である。そこからさらに悪路を約二時間かけてプンタ・ニヤータに向かう。暑さがじわじわと車の中まで浸透してきてエアコンが効かなくなる。このあたりは、一九五〇〜六〇年代は綿花栽培で栄えた地方だが、近年は落花生やごまの栽培で有名である。比較的大農式経営が多いようで農業用トラクターを頻繁に見かける。ワラで葺いた堅穴住居みたいな家が散見されるが、これは暑さを防ぐための昔からの工夫のようである。海岸近くの貯水タンクのある場所に到着、マナグアを出発して四時間かかった。式典が始まるまでに時間があるので海岸を見学することになった。北西前方に陸地が見えるがエルサルバドルである。ここは同国に近く、ラジオの電波も届くので村民はエルサルバドル時間（一時間の時差がある）を採用しているとのことである。その時差を知らなかったためわれわれ一行は早く着きすぎたようだ。海岸の砂は黒い色をしている。コシグイナ火山の粉塵が原因という。砂浜が白くないのはなんとなく寂寥感を与える。この半島の左側全般に海岸は絶壁状になっていて浜



写真42. 断崖と海の向こうはエルサルバドル



写真43. 式典風景、正面が貯水タンク



写真44. 歓迎の踊り

辺に降りるのは苦勞するそうだ（写真42参照）。

竣工が始まった（写真43）。恒例の両国歌の斉唱のあと、応援で来ていたソモテイジョのアグレシオ・アレハンドロ市長が挨拶をする。続いてカウンターパートのプンタ・ニヤータ住民水道委員会の代表が水道施設の完成ありがとうと感謝の辞を述べる。そして催し物の時間になると、子供たちのダンスが披露されたが、ダンスの先生も一緒に踊る（写真44）。この女性が村の人気者らしく、まあタバコ屋の看板娘といった風情でシナを作るので、つられて若者たちもダンスの輪に飛び入りして座が大いに盛り上がる。来賓のお客さんたちも実際、鄙にはまねな女性だと話している。引き続きエル・ピエホ市長のヘルマン・ムニョス氏が演説をする。



写真45. 水道水を飲む来賓の一人

次に完成した貯水タンク施設の見学である。蛇口をひねって水を出すと、勢いよく水がほとばしる(写真45)。この水道施設により約一五〇〇人の水が確保されると皆が喜んでくれる。草の根援助はこうして受益者と共にその完成を祝えるところがうれしく、日本の援助の効果を肌で感じられるところに醍醐味がある。

五 社会的弱者救済(更生施設)

ニカラグアではアルコール中毒や麻薬常用者が多く社会問題になっている。またそれらが原因で家庭内暴力が増していると言われる。とくに麻薬(コカイン)はコロンビアから米国に行く密輸ルートに組み込まれている。コロンビア

からセスナのような小型飛行機で麻薬がニカラグアのカリブ海側ないし太平洋側に運ばれてきて投下される。それらはいったんマナグアに集められ、次は陸路でメキシコに運ばれていくようだ。国内に運ばれてきた一部は当地で消費される。その量が年々増えているとのことである。家族省が管轄している施設には保育園、託児所や老人ホームがあるが、薬物依存症更生施設もあり、マナグア市にあるそれらの施設の一つから草の根に応募があった。オガール・クレア薬物依存症更生施設である。この施設は二〇〇〇年に設立され、アルコール、シンナー、薬物中毒、家庭内暴力、エイズ患者等家を追われたり、住む家のない男性を收容し、彼らが共同生活を送りながら、二年間の研修を受けて社会復帰するため

の施設で、老朽化した寄宿舎の新築要求であった。すでにある築三〇年の寄宿舎二棟に代えて二階建て一棟の新築が計画され、一階は台所、食堂、洗濯場、二階は四寝室、トイレ、シャワー設備の間取りで、收容人数は四〇名の規模である。費用は約七九五万円で、二〇〇六年七月一八日に調印された。申請団体は、オガール・クレア国際協会ニカラグア支部である。



写真46. 二階に集合

竣工式

竣工式は二〇〇六年一月二一日に行われた。大使館から比較的近いエドガー・ラン地区にあり、同地区は低所得層が住む地区でもある。更生施設は道路わきにあり一見中小企業の寮のような印象である。目付きの鋭い青年たちが三〇人ぐらいいて中に入るのにちよつと躊躇する。しかし入ったとたんみな笑顔で迎えてくれて安堵した。式典は、家族省官房長の来るのが遅れて四〇分後に始まった。恒例の国歌斉唱、来賓の挨拶とあり、ショー・タイムは、更生中の中年の男性がギターを弾いて歌った。これが結構上手で、陽気な歌声が下町に響く。アンコールの拍手で二〜三曲

が続いた。式典が終わると新施設の見学である。二階建てなので階段を上るのだが、階段が急で老齢の身には堪える。寝室もベッドも新しく、施設の入居者が皆喜んでいいる。先ほど歌を歌った男性が筆者に握手を求めて「ありがとう」と言ってくれる。筆者もうれしくなる。二階の手すりのところで皆で記念写真を撮る(写真46参照)。入居者の一日も早い更生にこの新施設が役立つよう祈って施設をあとにした。

六 農村女性の自立を助ける

ニカラグアにも女性の自立を助ける地元のNGOが設立されている。CANTERA(住民教育センター)というNGOで理事長は女性のアナベル・トレス氏である。この団体から農村女性(とくに母子家庭)への養蜂教育の機材供与の案件が申し込まれた。農村女性の自立は、農村の所得向上に貢献するので大使館も積極的に協力することになった。具体的には養蜂技術の研修に必要な機材の供与である。蜂蜜を採るためには種々の道具が必要で、またその道具の使い方を覚えなければならない。薰煙器、遠心分離機、蜜濾しフィルター、蜜刀、王籠、巢脾、防錆加工樽、五ガロン容器、オーバーオール作業服、覆面ネット、長靴等の機材を購入する必要がある、また、機材のいくつかは、米国やコストリカから購入

せねばならず時間を要する。この案件は二〇〇三年一二月四日に調印され、費用は約三二
四万円である。マナグア県マテアレ市トリバス県ベレン市において農村女性対象の研修会
が計画された。二〇〇四年二月に始まり、同年一月に終了した第一期の研修会では、二
二名の農村女性が卒業した。

終了式

二〇〇五年二月一六日にマテアレ市の住民教育センター所有地において式典が行われた。
マナグア市からマナグア湖に沿って西回りに四〇分ぐらい行った街道脇に同センターの農
場がある。到着するとトーレス氏たちが迎えてくれた。乾季なので山は乾燥し、木々には
葉がなく、ミツバチの巣箱は置かれていたが、ミツバチもころなしか元気がない。しか
し乾季にも咲く花はあるのでそれらの蜜を集めているとのことである。

式典は機材展示の小屋の前庭で行われた。国歌斉唱のあと、トーレス氏のあいさつがあ
り、その後、第一期研修生から筆者に採れた蜂蜜のプレゼントがあった。研修生たちは、
ドウルセ・ミエル（甘い蜜）養蜂協同組合を結成したそうであるが、プレゼントの蜂蜜は、さ
ぞかし甘くておいしいだろう。式典の催しものは、男女の踊り手による農民の踊りであっ
た（写真47参照）。引き続き研修修了者による工程の実演があった。遠心分離機に巣脾を入

れ回転させると、底にゆっくりと蜂蜜が溜まり黄金色に輝いてくる。研修を受けた女性が手際よく道具を使い説明する姿には自信が溢れていた（写真48）。

後日談であるが、研修を受けた女性たちは、起業するため蜂箱を買う必要がある。ミツバチ付き巣箱は一個一五〇ドルするが、原資のない女性たちはそこで上述したドウルセ・ミエル協同組合を結成、IICA（米州農業協力機構）から資金を得て巣箱を購入、蜂蜜生産を始めた。二〇〇六年には米国への蜂蜜輸出を計画した（地元紙 *El Nuevo Diario* 二〇〇六年三月一〇日号報道）。また、二期の研修は二〇〇六年三月から始まり、二五名の女性が参加した。草の根援助もこのように成功すると大層喜ばしく、その大きな要因は、熱心で有能なNGOの指導者の存在である。まさにトーレス理事長に乾杯。

なお、猪口邦子内閣府特命担当大臣（少子化・男女共同参画）が二〇〇六年八月にニカラグアを訪問した際、同地区を訪れてトーレス氏にも面会、歓待された。

七 大統領選挙支援

草の根援助でも異色なのは選挙支援である。いわばソフトの支援であるが、特定候補なし、特定政党を支援すれば選挙違反になるから、非常に難しいオペレーションである。ニ



写真47. 式典の垂れ幕の前でダンス



写真48. 研修生による実演

カラグアでは、二〇〇六年一月五日に大統領・国会議員選挙が行われた。日本は二〇〇一年の総選挙の時も種々の協力を行ったが、この選挙が民主的に行われるように、今回もまた協力をすることになった。すなわち主目的は、民主化支援のための協力であった。

日本の選挙支援は四本の柱から成っていた。(1) 選挙当日の選挙監視団への監視員の派遣(日本から二名)、(2) ワシントンにある選挙監視を指揮する米州機構(OAS)への支援一〇万ドル(緊急無償)、(3) 「見返り資金」を用いた最高選挙管理委員会(CSE)への支援、具体的には投票用紙を印刷するための印刷機購入費用三〇万ドル、および(4) 草の根資金を用いた支援であった。ニカラグアは民主・自由主義的政権ができてまだ一六年の歴史しかなく、民主主義が定着しては必ずしもいえない。司法制度、選挙制度などが極度に政治化、ないし政党化されている。たとえば、最高選挙管理委員会の判事は、政党の推す人が任命されるので中立性に問題がある。投票する人も容易に買収されやすいといわれる。また、ニカラグアでは一六歳以上に選挙権があるので学生をふくめた若年層への民主主義の啓蒙が必要となる。こうした特殊事情もあり、二つの草の根案件が承認された。

一つは、民主主義教育センターへの協力である。同センターは民主主義の定着のために

青少年を対象として教育しているもので、九〇年代に教育大臣であったウンベルト・ベリ氏（サン・マルコスにあるアベ・マリア・カレッジの学長）が会長をしている。同センターは青少年に対して投票に行くように呼びかけるとともに投票所の仕組み、投票のやり方を教えるために教本（選挙手続き・投票のマニュアル）とパンフレットを作成した。こちらの選挙では、二重投票を防ぐために投票後は親指に消えないインクでマークをつける。そういった一連の手続きを広報するのが目的だ。それらの費用約六八三万円を草の根援助で負担した。調印式は二〇〇六年六月二六日。同センターのボランティアは、それらのマニュアルを低所得層の住む地域や農村部に行って青少年に配布し、説明を行った。

もう一つは、中南米文化基金への協力である。同基金は二〇〇〇年に結成された地元のNGOであるが、傘下に「ニカラグアのための行動」(MPN)という委員会を持ち、民主主義啓蒙活動を積極的に行っていた。筆頭理事は、女性のピラー・マルティネス氏である。大統領・国会議員選挙に向けては、選挙のための身分証明書発行手続きの手助け、選挙人名簿の確認キャンペーン等の活動を行っている。草の根支援では、とくに、低所得層が投票に参加するためのキャンペーンに協力することになった、具体的には、投票促進のためポスター、横断幕、Tシャツ、帽子、パンフレットなどの作成費用、街頭宣伝費用を負

コラム5

二〇〇六年大統領・国会議員選挙

担して、民意を反映し公正な選挙ができるよう応援した。草の根で担当した分は約九〇五万円である。調印式は二〇〇六年九月一九日に行われた。

二〇〇六年一月五日の選挙では、サンディニスタの候補ダニエル・オルテガが一六年ぶりに大統領に再選された（コラム5参照）。

二〇〇六年一月五日に大統領・国会議員選挙が行われた。大統領の任期は五年なので前回は二〇〇一年に行われた。サンディニスタ民族解放戦線（FSLN）のオルテガ候補が一六年ぶりの再選を果たすか、はたまた自由派のモンテアレグレ候補（ニカラグア自由同盟、ALN）あるいは前副大統領であったやはり自由派のリソ候補（立憲自由党、PLC）が勝つか、その結果が大いに注目を集めた。米州機構（OAS）やヨーロッパ連合（EU）は選挙監視団を送りこみ、選挙に

おいて不正等が行われないか監視をした。日本からも二名の監視員が送られ、日本大使館からも人を出してOASのチームに入って監視を行った。

選挙当日は、朝七時から夕方六時まで投票が行われた。しかし、朝七時になっても投票所が開かなかつたり、この時期夕方は五時すぎると暗くなるが、電気が無く懐中電灯やロウソクの灯りで投票を行ったりするところが出たりと若干の混乱は見られたが、投票は無事終了した。各投票所ではその場で開票作業が行われ、その開票結果と投票用紙は中央の集計所（マナグア市のデニス・マルティネス球場）に運び込まれる。カリブ海側では船や飛行機で投票用紙を運ばなければならず時間がかかり、最高選挙管理委員会（CSE）が最終結果を発表したのは、一月二二日であった。

大統領選挙結果は、ダニエル・オルテガ（FSLN）の勝利であった。副大統領はハイメ・モラレス・カラソである。オルテガは八五〇年に大統領をしていたので一六年ぶりに再選を果たした。国会議員選挙結果は、サンディニスタ民

族解放戦線三八議席、立憲自由党二五議席、ニカラグア自由同盟二二議席、サンディニスタ刷新運動(MRS)五議席であった。MRSは、九〇年代にサンディニスタ民族解放戦線から袂を別つてできた政党で、マナグア市長であったレヴィテスを大統領候補に立てたが本人は選挙運動中に急死し、代わりにエドモンド・ハルキン(九〇〜九七年に女性大統領であったビオレッタ・チャモロの娘婿)が大統領候補に推された。

憲法の定めにより、現職の大統領(ボラーニョス)と次点の大統領候補(モンテアレグレ)は自動的に国会議員となる。よって国会は九二名で構成される。また、同時に行われた中米議会議員選挙結果は、サンディニスタ民族解放戦線八議席、立憲自由党六議席、ニカラグア自由同盟五議席、サンディニスタ刷新運動一議席であった。

オルテガ勝利の要因としては、自由派が候補を一本化できず票が割れたことに尽きる。オルテガは三八%の得票率、一方モンテアレグレ(二八%)とリソ(二七

%)の得票率を合わせると五五%になる。米国は陰で自由派の候補一本化に動いたが失敗したといわれる。立憲自由党の大物、アレマン元大統領(ポラーニョス政権下で汚職容疑により逮捕され自宅拘禁中)が反対したからである。もともとモンテアレグレは立憲自由党に属していたが、アレマンと仲たがいで新たな政党ニカラグア自由同盟を結成した。

オルテガ(写真49参照)は、二〇〇七年一月一〇日の大統領就任式で正式にニカラグアの大統領となった。ベネズエラ、エクアドル、キューバといった中南米の左派政権と親交があり、そうした路線を歩むと考えられている。



写真49. ダニエル・オルテガ大統領

八 モニタリングの事例

モニタリングは前述したように、通常は案件の中間、完了時、フォローアップの三回行われる。ここでは具体的事例（本章第六節）で取り上げた農村女性養蜂支援計画を用いて完了時モニタリングとフォローアップ調査の例を紹介する。完了時モニタリングは調査用紙が定まっについて、調査員はそれに記入する。視察日、視察者氏名、面会者、サイト視察の有無、ほかの面談者の氏名を書いたのち、モニタリング内容欄は、（イ）事業の完了時期、これは事業に遅れが出たかどうかのチェック、（ロ）建物、機材の据え付け状況、（ハ）広報協力、これはおもに日本のODAマークのついたステッカーが機材に貼ってあるかどうか、建物に両国国旗の付いた銘版がはめ込まれているかどうか、（ニ）申請団体の実施体制・維持管理体制について、（ホ）フォローすべき点、（ヘ）特記事項、の項目がある。特記事項の欄では、特に気をついたこと、関係者からの要望、問題点・注意事項等を記載する。さらに、視察時の写真や資料（新聞で紹介された場合などの切り抜き）を付けることになっている。

農村女性養蜂支援計画は、大使館で調印式が執り行われたのが二〇〇三年一月四日で

あった。完了モニタリングは二〇〇四年一月二六日に行われた。この日は、同プロジェクトによる農村女性を対象とする第一期養蜂研修会が、二〇〇四年二月九日に始まり、上級コースが終了した日でもあった。調査を行った委嘱員は、事業の完了時期(前述イ)について、「予定より遅れた」としている。原因は、蜂蜜の収納に使う防錆加工樽がニカラグア国内になくコストリカから輸入しなければならず時間がかかったこと、また濾過紙フィルターも国内になく米国から輸入するために時間がかかったからである。建物・機材(同ロ)はすべて揃っていて問題なし。広報協力(同ハ)もステッカーや銘版は付いている。団体の実施体制・維持管理体制(同ニ)は問題なし。フォローすべき点(同ホ)はとくにないとしている。完了時期が若干遅れた点は、止むを得ない事情と考えられる。この案件の終了式は、前述したように筆者も出席して二〇〇五年二月一六日に執り行われた。

草の根援助は作ったらお終いではなく、完成したプロジェクトが計画どおり管理・運営され受益者がその便益を享受しているかどうかが一番重要である。フォローアップ調査は、ニカラグアでは二〇〇三年度から始まった。過去に行った案件についてサイト視察を行い、関係者に面談をして案件が受益者のためになっているか、不正な使用はないか、建築物の場合老朽化の度合い、問題個所等の指摘を行う。この調査にも予め調査用紙が定められて

いて、それに記入するようになっていいる。フォローアップ調査用紙は、プロジェクト概要のあと、視察の欄で申請者への面会、関係者・受益者への面談、サイト視察の有無を書き、プロジェクト評価の欄で（イ）目的の達成度、（ロ）インパクト、（ハ）維持・管理体制、（ニ）案件の意義・妥当性、について五段階（aからe）で評価することになっている。また特記事項の欄では、完了時モニタリングと同様に、とくに気のついたこと、関係者からの要望、問題点・注意事項等を記載する。さらに、視察時の写真や資料（新聞で紹介された場合などの切り抜き）を付けることになっている。

農村女性養蜂支援計画のフォローアップ調査は、終了式から約一年たった二〇〇六年三月八日に行われた。第一回研修生は二二名が卒業し、終了時に米州農業協力機構（IICA）の協力により巣箱が全員に供与され養蜂を開始した。その後研修修了生がドウルセ・ミエル養蜂協同組合を結成し、生産した蜂蜜の販路を拡大するためにIICAに再度協力を求めた。視察日は正にこの協力のための契約調印日であり、アナベル・トーレスCANTEMIRA理事長、ヘラルド・エスクデロIICANICラグラ支部長、マリア・メルセデス・ドミンゲス養蜂協同組合長が集まった。調査用紙によればこの案件の評価は、目的の達成度b（十分達成された）、インパクトa（予想以上に高い）、維持・管理体制b（良好）、案件

の意義・妥当性 a (非常に高い) となっている。この高い評価は、二〇〇六年に行われる第二回研修会の用意で申請団体 CANTERA が農村女性のために奮闘していること、案件の実施されたマテアレ市とベレン市において養蜂研修生に限らない住民からの養蜂事業への協力や参加が申し込まれていることなどに拠っている。国際機関の IICA に話をつなげ、生産された蜂蜜の販路拡大 (輸出) までに案件が成長しているのも頼もしいことであると評価された。

一方、フォローアップ調査により新事実が見つかることもある。たとえば、ゴミ収集車の案件では、市役所が約束した収集車の管理運営のための収集業務独立採算制は、多くの市でそこまで達していない。また、ゴミ収集車の目的外使用 (人や物の運搬) も頻繁である。これについては、該当市より二〇〇四年より目的外不使用の誓約書を取ることになった。また、計画時に想定されなかった出水により漏水や湿気のため建物の損傷が著しいケースもあり、それらは修理案件として再度草の根援助で取り上げることになる (二〇〇五年度の例では、表四一六、五三番のカモアパ市少女保護施設改善計画)。このように時々想定外の事態が起きたりするが、草の根援助全体としては、その運営・管理・維持はおおむね良好に推移している。

九 他ドナーの援助との比較

具体的な事例でわかるように草の根援助は多岐な案件を網羅し、またその対象地域もニカラグア全土にわたっている。この地域の広がりにはほかの諸国の援助を凌ぐものである。地方を対象にしているものでそれは当たり前であるが、往々にして援助は首都ないしその周辺に集まりやすい。そこで大使館では新しい地方への開拓を薦め、地域の重複を避けるように「ニカラグア方式」で工夫してきた（前者はプラス点の、後者はマイナス点の加算）。その結果ニカラグア北部や南・北大西洋自治区での案件が徐々に増えてきた経緯がある。草の根援助の地域的広がりについては、米国外務省からも注目されどうやって選別しているかの質問を受けた。そこで簡単に他の国のニカラグア援助を概観しよう。

まず米国のニカラグア援助は、今までは技術協力に力を入れてきた。ニカラグアでは五つの援助目標（挑戦）を掲げている。それらは（一）安全と平和、（二）ガバナンス、（三）経済成長、（四）社会的投資、（五）人道的援助である。とくに民主化支援のために多くの専門家を派遣している。重点を置いているのがニカラグアの司法改革である。ニカラグアでは裁判官が政治任命され、それぞれ政党をバックにしている。最高裁判所の判事も政党

に左右される。そのため司法の中立性が著しく侵されている。米国は米州機構（OAS）とも協力してこうした点を直そうとしている。刑法、刑事訴訟法、仲裁法の新規改正に協力しているほか、裁判官任命制度も改革しようとしている。一方、最近では日本の一般プロジェクト無償に当たる援助が出てきた。貧困との闘い、貧富の差を縮めるための特別援助で「ミレニアム挑戦会計」と呼ばれる。ニカラグアも対象国となり、二〇〇六年から五年間にわたり一億七五〇〇万ドルが供与されることになった。この資金は地域限定型でニカラグアの場合、チナンデガ県とレオン県を中心に、とくに道路網の整備に使われることになっている。市場経済は物資の運搬が重要で、地方産品の市場へのアクセスが大切になる。運輸インフラを作ることには成長・所得増への近道である。

台湾（中華民国）の援助はある意味で非常にわかりやすい。ニカラグアと外交関係を有しているのです。その維持のために、大統領府と外務省の建物を建てて提供した。大統領府の大広間は「中国の間」と呼ばれている（但し、オルテガ政権になってからこの建物は使われていない）。また中米全体でコメは大量に消費されていて、ニカラグアでも稲作は盛んである。そのため稲作技術の移転が台湾の専門家によって行われている。

ドイツの援助は、一般的に、（一）社会的公正、（二）経済力向上、（三）環境的バランス

ス、(四) 政治的安定をめざして行われ、分野的には、環境保全、教育、エネルギー、人権等に力を入れている。ニカラグアでは地域的に北部に集中している。一九世紀初頭にドイツ人の移民がマタガルパを中心に多く入植したからである。現在でも「黒い森」(セルバ・ネグラ)というホテルが残っている。またドイツは、上下水道、環境保全、地方分権を重点にしている。そのため、ドイツ国旗のマークが付いた水道施設、貯水タンクによく遭遇する。また専門家派遣にも力を入れていて、地方の市役所や養護施設においてドイツ人のボランティアを見かける。DAC/OECDの資料によれば、対ニカラグア経済協力実績(支出純額ベース)でドイツは、二〇〇三年(一億二九〇〇万ドル)と二〇〇四年(二億七八〇〇万ドル)においてトップであった。因みに二〇〇一年はスペインが、二〇〇二年と二〇〇五年は米国がトップを占めた。日本は、二〇〇一年三位(六一九五万ドル)、二〇〇二年四位(三一四二万ドル)、二〇〇五年四位(四九二三万ドル)で二〇〇三年と二〇〇四年は五位以内に入れなかった(外務省国際協力局編『政府開発援助ODA国別データブック二〇〇七』二〇〇八年三月)。

デンマークの援助は特徴がある。長期にわたり農村道路の開発を行っている。しかも所得の低い南・北大西洋自治区に集中している。これはニカラグアにおいて太平洋側から大

西洋岸に到達する道路が、とくに南部においてまだ無く同国民の悲願だからである（ブルーフィールズに達する道路。なお日本はニカラグア政府と協力して、中央部のエル・ラマからククラヒルを通り大西洋岸のラグナ・デ・ペルラスまで「見返り資金」を利用した農村道路を開通させた）。同時にこれらの地区やリオ・サン・ファン県においてカカオ栽培の技術指導をしており、この生産物を市場へ持ち出すルートを必要としている。大西洋岸においても小規模港湾施設や運河の整備を行っており、コーン・アイランドにも栈橋を建設した。こうして農村道路開発（地方輸送）プログラムは、一九九九年から二〇〇六年までに一九〇〇万ドルが投下され、三八五キロメートルの農村道路建設、一二の栈橋・船着場建設、九の橋梁建設、三八五キロメートルの既存農村道路の定期的メンテナンスが達成された。これらにより受益した住民は十三万人に及んだと推計された。デンマークが他の国の行わない地域に特徴のある援助を行っているのは大変参考になる。

最近の援助動向としてプロジェクト型援助から財政支援の資金提供型援助への動きがある。とくにこれらは、世界銀行、EU代表部、オランダ、スイス、北欧諸国を中心に進められている。援助の資金を相手国政府の財務省に渡しその用途や管理は相手国に任せる財政支援や、開発部門を特定してそこに各国の援助資金をプールし、相手国政府が用いるセ

クター・ワイド・アプローチがそれらである。この背景には、援助は金と人手がかかるということがある。ヨーロッパの比較的小さい国は、プロジェクト型援助の実行管理に必要な資金と人手を負担できなくなってきたことがある。相手国政府に資金の管理・運用を任せば言葉の問題もなく、その国の自主性を尊重できる（オーナーシップの確立。但し落し穴は、相手国政府の実行能力）。ニカラグアでは、一九九八年のハリケーン・ミッチ被害以降援助が急増したが、プロジェクト型援助が主流であった。しかし最近では財政支援も行われ出してきた。EU代表部を中心としてオランダ、スウェーデンなどが参加している。セクター・ワイド・アプローチの例としては、農業開発にフィンランド、スウェーデン、ノルウェイ、スイスが参加してコモン・ファンドを作っている。この資金は、地方農業生産開発計画（PRORURAL）に使用されることになっている。日本はこのプログラムの行動規範グループのメンバーになっているが、コモン・ファンドには加わっていない。

このようにして各国の援助も多種多様であるが、日本の草の根援助のように小規模ではあるが、ニカラグア全土を網羅する形態の援助はない。また地方の住民から直接感謝されるという意味において草の根援助は際立っている。なお、日本の草の根援助において他のドナーとの協調案件の例もあり、二〇〇三年度に承認されたリオ・サン・ファン県エル・

カステイロヨ市ボカ・デ・サバロス保健所建設計画においては、フィンランド、オランダおよびカナダと協力して火事で焼失した同保健所の建設を行った。ボラーニョス大統領の南部地方視察に合わせて二〇〇六年三月三〇日にこの竣工式が行われ、筆者も参加した。

各国援助の実態の一部については、日本大使館が二〇〇六年六月八日にマナグアにおいて開催したセミナー「経済協力―成長か貧困削減か」の報告書 (Embajada del Japón, Crecimiento o reducción de la pobreza, 2006 および日本大使館のホーム・ページ http://www.ni.emb-japan.go.jp/esp/index_esp.htm を参照) において、日本のほか、オランダ、米国 (USAID)、カナダ (CIDA)、ロシア、デンマーク、世界銀行の対ニカラグア援助ないし開発への取り組み方が紹介されているので参照していただければ幸甚である。ただしこの報告書は西語である。